

アモア

一日一言

しゃれた言葉とエピソードの泉

阿刀田 高・編著



8



9



15



16



17



28



22



23



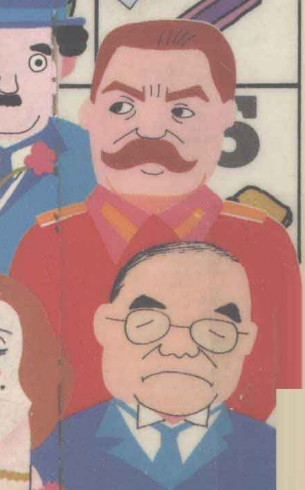
35



29



30



ムーモア一日一言

●協定により検印省略

昭和55年6月25日 印刷

昭和55年6月30日 発行

編著者 阿刀田高

発行者 池田菊敏

印刷所 足柄印刷株式会社

製本所 永井製本株式会社

発行所 株式会社 池田書店

東京都新宿区弁天町43 (〒162)

電話 (03) 267-6821 / 振替東京 4-165425

落丁、乱丁本はおとりかえいたします。

© Takashi Atōda, 1980 Printed in Japan

0090-104762-0316 担当・小林

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

トモア

一日一言

しゃれた言葉とエピソードの泉

阿刀田 高・編著



*プロローグ

悪魔「ダンナ。東の空が明るくなってきた。また、こりもせず新しい一年がやってきました」

天使「さよう。かがやかしい年の黎明だ……。ところで悪魔。私は今、美しい東雲を見ながら考えていたんだ。今年こそ思いきって人間どもに性根を入れかえさせ、正しい生活を送らせようとな」

悪魔「ほう。それはそれは。してその手だては？」

天使「お前も知っているように人間がこの世に住みついてこのかた、だれもお前に魂を売ったわけではない。徳を重んじ、真理を愛し、良心に従い、みさおを正しくして生きたものもたくさんいたのだ。そこで私は思った……この一年はそういう心正しい人間どもが、考え、おこなったことどもを手短に書きあらわし、日々の訓戒として皆の前にしめしてみようとな」

悪魔「ダンナ。こりや驚きましたねエ。そいつアあつしが考えていたことでやす。あつしはネ、有史以来——イヤ、ちよつとコトバがいかめしすぎたわい——まア数千年このかた、この私めに魂を売った人間はごまんとやす。こいつらのコトバやおこないを日めくりのカレンダーに仕立てその教えのおもむくまま、今年もひとつ人間どもにおおいに人生をはかなんでもらったり、みだらな楽しみを味わってもらおうと、まア、こんなふうにな」

天使「まア待て、悪魔。私は思ひきつて心を広くするつもりでいるのだ。なるほどこの世には神を裏切ったものも多い。ガリレオやデカルトのようにな。だが、そんなものどもを含めて、とにかく心正しく生きた人間、現世の規範としてふさわしい人間、こういったものどもの言行をあまねく集めてみようと考えているのだ」

悪魔「まことにけつこうなおぼしめしで。なにしろダンナときたら世の中が正しくさえあれば、それでよしとお考えになる。水がくさろうとこぼれようと、タライの方さえがなじようなら万事めでたしという寸法だ。されど、されど、ままならぬは浮き世のことよ。あいにくと人間世界はそん

なにあいのないもんじやありませぬ。ぶちまけていえば、人間はもつと自由だし、悪事が好きだし、浮気者なんだ。ウソと思われるなら下界の新聞とやらをご覧しろ……だからあつしは、ありのままの人間——ずいぶんお高くとまつておつにすましこんでるのもいやすが、そういう仮面をひっぱがし、人間なんてつまるところこんなものサ、という例をせつせと集めてみやした。なかなか楽しい名文句がたんとありやすぜ」

天使「あいかわらずのむだ口がはじまったわい……やれ、太陽もすっかり顔をあらわした。もはやお前などとらちもない口論を重ねる時でもあるまい。（天使、天空の方へと二歩三步足をすすめるが、急に立ち止つて）だがナ悪魔。最後に一言だけいおう。いったいに人間が読書に親しみ、古人のコトバに耳を傾けようなどと思うのは、魂の向上をもとめている時なのだ。それを思えば、お前が集めたたわごとなど、よし多少おもしろおかしいところがあつたとしても、思ひのはか読者には相手にされまいて……とにかく私は私なりに善意のカレンダーを作るぞ。余白があつたらお前の集めたコトバでも入れるがよからう」（天使、さつさと退場）

悪魔（太陽の光にまぶしげに顔をゆがめながら独白）「はいはい。せいぜい余白を使わせていただきやす……ところで、どうも天使のダンナは近ごろの出版、読書界の実情をご存知ないらしいな。悪いものほどよく売れる……テヘヘ、これは内しよ内しよ。きっとあつしが集めたものの方がみなさんによろこばれやすぜエ」（ピョンピョンと小おどりして退場）

踊るは踊るは ひざの上

天道様のひざの上

星の踊りのひと踊り

*

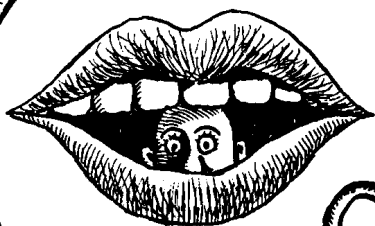
*

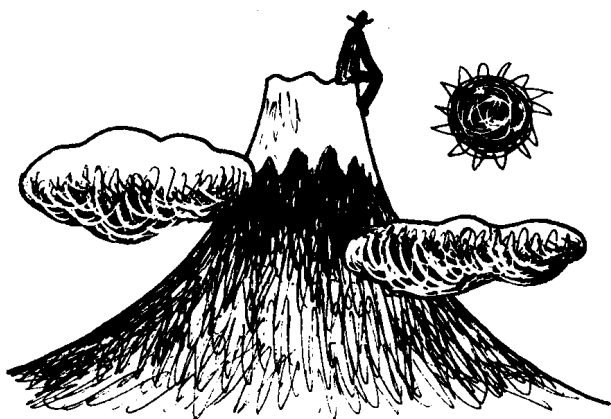
*

*

*本文中「」に入れてしめしたコトバが（原則として）各項目にあげた人自身のコトバである。

1 月





一富士二鷹^{たか}三なすび

古くからある成句の中には「一つ何々二つ何々」という形のものがたいへん多い。例えば――

「一はめ二こなし三思い、四はかぜ引く」――クシヤミの回数によるうわさ占いだ。

「一押し二金三男」――女性に愛される条件のランキング。「三男」はむろん男つぷりのこと。

「一赤二黒三白四ぶち」――おいしい犬肉の順序、ホントかねエ。

ところでこの「一富士二鷹三なすび」だが、いうまでもなくめでたい夢のベスト・スリー。だがなぜそうなのか明確ではない。一説によると「一に富士、二に鷹の羽の打ちちがい、三に名をなす伊賀の上野に」ということなんだそうだ。つまり、富士は曾我兄弟富士の仇討ち。

鷹の羽の打ちちがいは浅野家の紋所で赤穂四十七士の仇討ち。伊賀の上野は荒木又右衛門の仇討ち。いうなれば仇討ちオンパレード。曲がりなりにも平和憲法のある国としては、あんまりめでたいこととは思えないんだがね。

1 月

2 日

私の愛読書

マーク・トウエン

(1835—1910)

↓アメリカのユーモア作家。ミシシッピ—川流域の下層社会を舞台とした作品が多い。また自然を愛し文明を憎んだ。「トム・ソーヤの冒険」など。

説教を聞いた後で、トウエンは皮肉な顔をしていった。「たいへん感銘しました。ただ一語みんな私の愛読している本に書いてあることでした」

説教者が「そんなバカな！」とばかりカンカンに怒るとトウエン「では早速証拠の本を送りましょう」といって帰ってしまった。後日、説教者が手にしたのは一冊の国語辞書だった。

トウエンはイタズラ好きだったが、また鋭い批評精神の持ち主でもあった。「競馬を成り立たせるのは意見の相違だ」などは、自分だけには正しいと思う人間の意見が、それぞれ違っていることを巧みに皮肉ったコトバではないか。

3 日

わからない話

莊子

↓中国・戦国時代（前五—三世紀）の思想家。老子の思想を発展させ、人間は天から与えられた天性のままに生きるべきだと説いた。実在を疑う人もいる。

莊子が友人と水のほとりを歩いていった。莊子は足をとめ「ごらん、あの白い魚、楽しそうに泳いでいるネ」といった。すると友人が、

「魚でないキミに魚の楽しみがわかるまい」とさからった。すると莊子も負けていない。

「よくでないキミに、なんでよくの心中がわかる？……いいかい、きみに魚の楽しみがわかるまい」といったきみは他人の心中がわかるという前提に立っているんだ。それならよくに魚の心中がわかったっていいじゃないか」

いささかキツネにつままれたような話だが論理は一応通っている。

4 日

男 と 女

三島由紀夫

(1925—1970)

↓この日生まれた現代の小説家。
戦後を代表する作家のひとり。と
ぎすまされた美意識で官能の世界
を描いた。「仮面の告白」「金閣
寺」「愛の渇き」など。

「駅の前などでよく待ち人がたくさん立っている。その一人一人が何分待たされているか、時間で計ってみるがよろしい。まず二十分以上待たされている女があつて、なお彼女がそこを去りがてにしているなら彼女は来るべき男とすでに肉体関係があると思つてもいい。もし男が二十分以上待たされていたら、その男は来るべき彼女と、まだ肉体関係がないのだと思つていい。十中八九、肉体関係を持つまでは女のほうが強く、持つてからは男のほうが強いという法則が、つまりその勝敗がこんな待ち時間によくあらわれている」(不道德教育講座)——どっちがしあわせかは、また別問題。

5 日

女の好み

夏目漱石

(1867—1912)

↓この日生まれた文学者。近代日本文学家中、最高峰に立つ一人であり、すぐれた文学理論家でもある。「こころ」「坊ちゃん」「吾輩は猫である」など。

「議論はいや。よく男の方は議論だけなさるのね。おもしろそうに。カラの盃でよくあゝあきもせず献酬(けんじゅう)ができると思ひますわ」
名作「こころ」のなかの一句だ。キレ味のよい皮肉だし、女の人は、こんなことを感ずることもきつと多いのだろう。

一般に女性には「だれさんがどうした」というような具体的な話を好み、抽象化された論理を樂しまない。心理テストと数学パズル、よろめきドラマとゴジラ、性の体験談とフランス小ばなし——

どちらが女性の趣味にかなうかは明白だし、その理由もあきらかだ。

1 月

6 日

うれしい事

良寛

(1758-1831)

↓この日死んだ江戸後期の禅僧。歌人。子どもたちと無邪気にたわむれたり、七十を過ぎてから若い尼僧と恋愛したり、とにかく、ただものではなかった。

「錢を拾うのはうれしいものだ」というのを聞いた良寛、さっそくためしにしてみることにした。自分の錢をポンとほうって拾ってみる。また、ほうる。また拾う、ちつともうれしくない。「さては、だまされたか」と思いながら、もう一度遠くへほうってみた。すると錢はコロコロところがってどこかへ行ってしまった。さア大変。良寛和尚、熱心に捜しまわって、ようやく見つけるや「なるほど、錢を拾うはうれしいものじや」

*

*

*

形身とてなにか残さん春は花

山ほととぎす秋はもみじ葉

7 日

なぜ人間は

ジェームズ・サーバー

(1894-1961)

↓アメリカの作家。現代文明の中で歪んでゆく心や、押し流されていく感情を鋭いタッチで描くのを得意とした。また、挿絵も自分で描いた。

レミングというネズミは、ある日突然群をなして海に向かい、全員海に落ちて自殺するといふ、不思議な習性を持っている。

サーバーは、そのレミングとの対話をテーマとしたショート・ショートを書いた。

「キミたちはなぜ海に突進して溺死するのかね？」

するとレミングが答えた。

「なぜ人間たちは、それをしないのかね」

その通り。生きとし生けるものの行動様式は、そう簡単に説明のつけられるものではない。自分たちが当然と思っていることも、ほかの人たちから見ても少しも当然でないんだ。

猫 と 女

ポール・マリ・ヴェルレーヌ

(1844-1896)

↓この日貧困と退廃の中で死んだフランスの詩人。「秋の歌」「都に雨の降ることく」など日本にもなじみが深い。ランボーとの同性愛もよく知られている。

女が牝猫と遊んでいた

白い女の手 白い猫の足

ほの暗い宵の光のただ中で

たわむれ遊ぶは見ものだった

鋭くカミソリのようにみがかれた

人にとげするメノウの爪を

まっ黒な手袋にひそめて

女は持っていた あばずれめ!

猫はやさしくじやれつくが鋭い爪はかくしてた

それもなにやら風情があった

陽気な笑いが起こる閨に、四つの瞳が

燐の光をもやしていた

男の優越感

シモーヌ・ド・ボーヴォアール

(1908-)

↓この日生まれたフランスの女流作家。実存主義の女王などと呼ばれる。サルトルの友人であり弟子であり恋人でもある。大胆な女性論「第二の性」など。

「人は女に生まれない。女になるのだ」——一つの哲学を象徴する名言だ。やさしくいえば、女という性質(状態)がもともとあるのではなく、今日までの全文明が女という性質をつくりあげたのだということ。一例をあげれば、つまり……

親父が「さア、男の子はこうやっておシッコをするんだ。穴ボコからやる女の子とは違うんだ」などと男の子の前で高々と噴水をあげる。これが男の子に優越感をいち早く与え、一方、穴ボコしかない女の子は劣等感を抱き、その代償に愛嬌よく振舞って、みんなに好かれようとする——かくて第二の性、女性が生まれる、とね。

10 日

猫に自由を

徳川綱吉

(1646-1709)

↓この日死んだ徳川第五代將軍。柳沢吉保を重用したことで失政。大好きで生類憐みの令を出し、かえって人民を苦しめた。湯島の聖堂を建てたのもこの人。

生類憐みの令から三百年、時移り所変わらず東京で、政治家が「猫は家の中で飼うべし」というと、愛猫家一致団結して「猫に自由を」と「生類憐みのおん願ひ」。時代変われば立場も変わる。

猫好きにしてみれば、猫のすることなすこと何でもかわいい。しかし猫嫌いにしてみればこれは公害なのだ。

春先、夜中に恋の大合唱、他人の家から魚の無断持ち出し、赤ん坊への危害、等々。その上猫の特徴であるはずのねずみさえつかまえられるなくなった。これでは「猫らしさ」もない。

みごもりて盗みて食ひて猫走る 多佳子

11 日

危険な逆説

ウィリアム・ジェームズ

(1842-1910)

↓この日生まれたアメリカの心理学者。哲学者。プラグマチズム（実用主義）の創唱者。アメリカ人の思想・心理生活に、彼が与えた影響はいちじるしい。

「悲しいから泣くんじやない。泣くから悲しくなるんだ」

さすがは心理学者。味なことをおっしゃる。涙を流すということの最初の動機は、たしかに悲しみなのだが、それを持続させ、一層激しくするのは「泣く」という行動が原因となっている、というのだ。

これは危険な逆説ではあるが、一つの真理でもある。同様の論法はほかでも成り立っている。例えば、「労働が苦しいからつらいのではなく、つらいと思うから労働が苦しいのだ」「好きだから恋人にするのではなく、恋人にしたから好きになってしまったのだ」などと。

12 日

ぜいたく

ヨハン・H・ペスタロッツ

(1746-1827)

↓この日生まれたスイスの教育者。孤児教育、初等教育に生涯をささげた。人間愛を基調とする教育理念は近代教育に大きな足跡を残した。「隠者の夕暮」など。

ペスタロッツはなによりも子どもの人格と公平な判断力を信頼していた。こちらが問題を正しい態度で訴えれば子どもはおとなより始末がよいものだ。

孤児院で食料不足が叫ばれた時、彼はいった。「子どもたちよ。お前たちは以前ウチにいた時よりよくはないか。将来、精一杯働いて生活できる程度よりもっとゼイタクに育ててほしいか。それとも必要なものが不足しているのか。私がお前たちにこれ以上してやれると思うか。私は今この通り八十人の子どもの世話ができるが、同じお金で四十人の子どもを世話する方をお前たち自身、のぞむのか、それが正しいか」

13 日

大将の悲哀

源頼朝

(1147-1199)

↓この日死んだ鎌倉幕府初代將軍。平治の乱で伊豆に流されたが、後に平氏を滅亡させ、鎌倉に幕府を開いた。武家政治の創始者として知られている。

歴史を学ぶ上で欠かせない人物というのがいる。源頼朝もその一人であろう。幸運もあったろうが、ともかく幕府をきずいたのだから。しかし歴史物語としては、弟・義経にはかなわない。判官びいきというコトバもあるほどで、英雄伝説には事欠かない。おまけに頼朝の死も無様である。相模の国（神奈川県）で落馬して、それがもとで死んだといわれる。実際のところ是不明だが、不慮の死であることは疑いが無い。義経らの亡霊に驚かされたとか、やきもちが因で誤って政子に殺されたとか、ロクな話がない。人に好かれるためには、頂点を極めてはいけない、たとえば貴ノ花のごとく、という教訓。

14 日

人物評価

新島襄じょう

(1843~1890)

↓この日生まれた明治期の教育者。キリスト教徒。若くしてアメリカに留学。帰国してキリスト教教育と伝道に専心し、同志社(大学)を設立した。

15 日

狂気のキッス

フランツ・グリルパルツェル

(1791~1872)

↓この日生まれたオーストリアの劇作家。ゲーテ、シラーなどにつぐドイツ古典派の一人。作品に「金の羊毛皮」「海の波恋の波」「サフオー」など。

「一事をもつて人を評定するなかれ。まず、その気質を察し、教育を探り、その境遇と生活の位置とを知り、終わりにその非常な場合に処する挙動を観察すべし。酷くに過ぐべからず。緻ち(こまかいこと)に失すべからず。酷評の眼をもつて人を見るのはもつとも不幸なるかな」

つまり、細君が若いやさ男と浮き名を流しても、まず彼女の美を愛する気質を察し、開放的な男女共学教育を思い、また現在、オレのようなバカな宿六とともに暮している境遇をあわれみ、こつちが非常手段に出れば、駆落ちくらしかねないことを観察すべし、ということかな。

手の上なら 尊敬のキッス

ひたいの上なら 友情のキッス

はおの上なら 好意のキッス

くちびるならば 愛のキッス

閉じたまぶたは あこがれのキッス

手のひらならば お願いのキッス

腕首ならば 欲望のキッス

さて、そのほかは

みんな狂気のさたである。

*

*

*

ご心配なく、十九世紀の話だ。さもないと昨今の恋人はみんな狂人になるからねエ。